



大阪が“東洋のマンチェスター”と呼ばれた時代に設立された会員施設、綿業会館。国指定重要文化財(左)。豪商芝川家の6代目当主が建設した芝川ビル。マヤ・インカの装飾は当主の趣味で、彼は大日本果汁株式会社(後のニッカウキスキー)設立の際の資金援助も行っている。国登録有形文化財(中)。“知の殿堂”たる佇まいの大阪府立中之島図書館。国指定重要文化財(右)。

## ファサードが語る“大大阪”の栄華

明治から大大阪時代にかけて、大阪の中心部には、格調高い建物が数多く築かれた。それらは時代を超え、現代の都市景観に彩りを与えている。外観はルネッサンス式を基本とする大阪府立中之島図書館は、1904(明治37)年、第15代住友吉左衛門の寄付により建てられ、1922(大正11)年に住友家の寄付により増築された両翼とともに、国の重要文化財に指定されている。

綿業会館(1931年)や大阪証券取引所ビル(1935年)、芝川ビル(1927年)、生駒ビルヂング(1930年)、高麗橋ビル(1912年)など、船場を歩けば1

ブロックごとと言っても言い過ぎではないほど、そここで味のあるルックスの近代建築に出会い、繊細な意匠や歴史の香りに足が止まる。あまり知られていないが、大阪府の登録有形文化財の数は全国最多。街そのものがギャラリーのように感じられるのは、そんな理由からだろう。建物が、昭和、平成、令和と守り継がれ、中をのぞけば時代に沿った活用がなされている。川辺に出て橋の上に立つと、目の前に広がるのは現代の都市の夕景。川の水が映してきた人びとの営みは、美しい景色を生み、川の流れとともにまた新たな歴史につながってゆく。

大阪証券取引所ビル。2004年に改装されたが、写真の円形エントランスホールは保存された。五代友厚の銅像も立つ(左)。当時大阪の目抜き通りだった堺筋に建てられた生駒ビルヂング。時計店のビルで、当時最先端のアール・デコ様式。国登録有形文化財(中)。辰野金吾設計の旧大阪教育生命保険ビル(現オペラ・ドメーン高麗橋/右)。

